【エッセイ】

新聞醜悪録続貂（承前）

――言語時評・十六――

工藤力男

新聞を見、テレビを見て、しょっちゅう腹を立てている。世を憂え国を憂えるというほど大層なことではない。コトバである。もっともテレビのほうは、何言ってやがるコノヤロ、と思ったという記憶だけが残って、それがどういうコトバであったかはすぐ忘れてしまうから始末がわるい。その点新聞は、何だったっけ、ときのうおとといの新聞をひっくりかえして見られる便宜がある。

右の七行はわたしの文章ではない。前回も引いた高島俊男「新聞醜悪録」（『本が好き、悪口言うのはもっと好き』）の冒頭である。右の引用部分には次の文章が続く（改行を斜線に代えて引く）。

どの面が多いかというと、トップはスポーツ面である。スポーツ記者というのはやっぱりスポーツ選手あがりで、学生時代は野球や柔道ばかりやってて文章なんか書いたことがないのかねえ。／たとえば「ゲキを飛ばす」というのがスポーツ記者は好きらしくて、よく出てくる。「なさけない負けかたに腹を立てた星野監督は選手を集めてゲキを飛ばした」といったあんばい。

この感想も、時評の三「スポーツ報道の現在」に書いた感想に通ずる。高島さんは、「新聞を読んでいるとこういうのが次から次へと出てきて精神衛生にわるい」と言い、「子息」「指摘」「と見る」などを挙げてその醜悪ぶりを指

摘する。最後には編集委員の「細心の配慮が望まれる」について、「望む」と言えばよい、「この言い方は、曖昧、かつ気持ちがわるい」と断じている。

高島さんの言及は、意味の取り違い、慣用句のうろ覚え、意味変化への無神経さなどの批判が中心である。本稿では主に文法に注目して新聞の日本語を考える。

紙名なき用例が朝日新聞のものであることなどは前稿に準ずる。複数の見出しは適宜に順序を判断して二重の横線＝で区切る。明確な割り書きは山がた〈〉で括る。その他、字の大小・組み方の縦横は必ずしも厳密には再現しない。

昔、大阪本社版朝日新聞に三十回にわたって連載された「新聞　製作から配達まで」がある（1975.10～11　以下、略称「連載」、丸数字は回序）。コンピューター化以前なので、技術の面は古くなった話が多いが、新聞製作の裏事情が知られて有益である。

新聞や雑誌の題字には、常用漢字と異なる字体の使われることがある。讀賣、産經、日本經濟の各紙、本誌の文藝もそうである。ちょっとみでは分明でないが、朝日の「新」の「木」には横画が二本ある。唐の書家、歐陽詢の「宗聖観記」から採ったのだという（「連載」⑥）。新聞や雑誌の標題はその媒体の顔だから、国語政策からの逸脱も可なりという主張は正当である。

標題が新聞の顔なら、記事の顔は見出しである。その見出しの実態やいかに。

日本「壁」破り五輪＝女子サッカー、北朝鮮に3―0＝研究徹底、「負け癖」消す（2004.4.25）

筆頭は一段四十三行を使った横組み。日本の女子サッカーチームにとって壁のような存在であった北朝鮮チームを徹底的に研究して負け癖を克服し、三対零で破ってオリンピックへの出場権を獲得したという内容を、はしょりにはしょった結果である。

「輸入再開」夏めど結論＝日米協議で合意＝米国産牛肉（2004.4.25）

米国産牛肉の輸入再開をめぐる日米両政府代表者の協議で、今年の夏をめどに結論を出すべく努力するということで合意したという意味である。

発注見返り、社保庁に現金＝〈ＮＴＴデータ＝子会社から〉＝1人年数十万円（2004.8.8）

これは、発注の見返りとして社会保険庁に現金が贈られた

ということらしい。以上三点、わたしの受けいれがたい見出し三傑、もう少しスマートにできないものだろうか。

編集委員が交替で書く「補助線」欄に、「出店ラッシュを読み解く」と副題した「「SCでも行くか」の休日」があった（2007.4.15）。SCがわからないので読んでみると、ショッピングセンターのことで、今世紀、休日にはすることがなくて、SCへ行こうかという過ごし方になる旨の文章である。文中には「SC|にでも行くか」が二回見える。

紙面で助詞の省略遊びをすることもある（2006.5.21）。

「ばん馬」乗った新宿

「ダビンチ・コード」並んだ全国公開

並ぶように載せた二つの記事の見出しである。非文性を引用符で少しは弱めているが、輓曳競馬を知る日本人は多くあるまいから、これがバンバと正確に読まれる保証はない。後者が理解できる人には、話題の映画であることは自明だろう。一行に詰めるなら、ともに引用符のない「ばんばに乗った」「ダビンチコードに並んだ」でよい。

格助詞のむやみな省略は日本語の論理を無視したものである。主格助詞「が」は、係助詞「は／も」があると、それが代理を努めるので義務的に省かれる。「に」も同じ条件で省くことができるが任意であり、用法が広いのでその他のばあいは省きにくい。「を」は省略されることが多いが、それは談話に一般的でも、書き言葉でやたらに省くと、いかにも舌足らずな印象が際立つ。

助詞の幅を広げて、もう少し実例をあげよう。

大阪の中1自殺〈原因いじめ＝学校認める〉（2006.11.19）

中学生の自殺の原因がいじめであることを学校が認めたというのだから、極めて高度な省略術を駆使していることになる。

〈対イラン売却＝「ロシア中止を」〉ミサイル巡り米（2006.11.22）

ロシアがイランにミサイルを売却することを中止するように、米国が要求したという意である。これがすんなりと理解できる人はよほどの国際政治通であろう。

秋田県藤里町で起こった児童の連続怪死事件で、容疑者の供述を報ずる記事に次の見出しがあった。二つめ以下が特に困る。

「彩香は橋から転落」＝母子で川行った＝畠山供述

「動転、助け求めず」（讀夕 2006.7.14）

次の見出しは、直話らしく書いてあるので、いっそう悪質である。

「火事の写メ新聞載った」＝〈放火容疑＝長野の女〉＝4月の全焼ＨＰに記述（讀 2006.7.11）

本文には「火事の写メ（携帯電話で撮った写真）撮ったら、今日の新聞に載ったよ～。粗品もらえるらしい。わあい」とある。

新聞記者にとって助詞はあってなきがごとく、こんなのもある。

米軍拘束のテロ容疑者＝イラク側引き渡し棄却＝米連邦高裁（2007.2.11）

「米連邦高裁」は本文の字より小さいゴチックなので、一見なんのことかわからない。日本語の文法では、イラク側が棄却したという解釈を求めるからである。

日本語の動詞の連用形は下に係ってゆく力が弱いので、「恋、光、流し」のようにすぐに名詞化する。そこで、連用形に修飾機能を負わせるには、「敢えて、至って、せめて、つとめて」のように「て」を添える必要があったし、動詞を続けるとすぐに複合動詞に転じてしまう。さもないと宙ぶらりんの表現になる。次の諸例がいかにも締まらない表現に見えるのはそのせいである。

暑いわ寒いわ…低気圧の仕業＝例年より北を通過＝南の空気呼び込み暑く（2004.4.25）

「呼び込み」を「暑く」の原因と解釈させたいのだろうが、既に名詞に転じている。

複数ガス管＝同時期破損＝北見事故＝地中凍りひずみ？（2007.1.21）

これは、「地中が凍ってひずみが生じたか」の意であろうが、著しい短絡である。

〈「石綿は危険」＝無視し後手に〉（2007.7.8）

米国科学アカデミーの石綿被害に関する報告を無視して、日本では対策が後手に回ったことを批判した投書の標題である。連用形「無視し」を強引に副詞法に用いている。

インドネシアのアチェで日本の平和支援事業に携わる豪州人を紹介する「ひと」欄（2006.12.24）の本文「4（ママ）輪駆動車で半日かけ山へ。」がわからなかった。「四輪駆動車で半日をかけて山に入り」の意なのである。

次にあげる本文中の「試み死ぬ」から受ける違和感は大

きい。

数千人ものアフリカ人が欧州へ侵入を試み死に、数万人が違法な労働市場で犯罪のような搾取を受けながら細々と暮らす。（2006.12.24）

この手の複合動詞は、ひとつ事件を報道する数紙によく出る。その例（2005.10.19）――

中1、母殴り死なす（讀タ）

中1母殴り死なす（産）

今、新聞が見出しに文語形を使うことはほとんどないが、「死なす」はどうなのだろうか。これについて、『日本国語大辞典』第二版には五段活用とあり、樋口一葉が初出、次いで有島武郎。用例はともに「死なして」、若い語なのである。しかし、否定形は「死なさない／ず」ではなく「死なせない／ず」であろう。『明解国語辞典』初版は「五段」で掲げながら「下一」を括弧書きしている。これは、湯澤幸吉郎『現代語法の諸問題』（1944）など多くの研究がある、活用の揺れる動詞なのである。

「死なす」は下一段活用から四段活用に移りゆく過程にあり、新聞が複合動詞として用いる「殴り死なす」は俗語の域を出ないと思う。

右に見た、石綿に関する投書の同類に戻る。初めに中学二年生の投書。

〈すぐ酔う父は＝酒控え健康に〉（2007.6.10）

酔うと気が大きくなる父親が酒を控えて健康になったのか、これだけでは判断できないが、投書の趣旨は願望であった。長い原題を編集部が縮め、助詞も述語も省いたのだろう。

〈原爆発言機に＝認識深めたい〉（2007.7.8）

「原爆発言機」という機械があるわけではない。久間防衛大臣が原爆投下はしょうがなかったと発言して辞任に追い込まれたこの機会に、の意である。

かかる不思議な現象は投書欄に特に多い。見出しは一段に限り、二行に分けることを原則としているからである。しかもその二行の字数を揃えることを至上命題とするようだ。一般に一段記事の見出しは七字が最多、大半は右のように六字である。だが、ある主張を述べる読者の投書などは、その趣旨を六字ずつ二行にまとめることはかなり難しい。悪しき二行主義、愚かな同字数主義である。

この事態が進行した原因について考えると、近年の新聞の紙面構成の問題に行きつく。我が記憶に残る最初の新聞

の紙面は一段が十五字詰めであった。中年のころに十三字になり、今は十一字。字を大きくしたもので、老眼が進んだ自分にはありがたいが、事は字を大きくして一行の字数を減らせば済む問題ではない。

日本の原稿用紙が一行廿字で流通するに至った経緯について今は触れないが、廿字は適当な長さだと思う。日本人は小学生時代から、この枠で文章を書くことを学ぶのである。しかるに、ふだん最もよく目にする新聞の一行が十一字詰めでは困るではないか。朝日新聞は読者の短詩を載せる欄は二段抜きで組んでいる。俳句・川柳は最少でも十七字を要するのだから当然である。文藝欄を優遇し、投書欄を冷遇するわけである。

近年、各紙ともページすなわち内容ごとに紙面構成を変えるのは好ましい傾向である。朝日新聞の読書欄は、縦組み横組みを交えて一段十一字から廿三字までの数種類で構成するが、他の紙面は一段十一字詰めがなお多い。音節文字（かな）と表語文字（漢字）併用の日本語の新聞なのにこれである。表語文字だけの人民日報でさえ、四段（廿六字）ないし七段（十三字）で組んでいる（2007.8.24）。日本の新聞も見習うべきである。

二行主義だけが悪いというわけではない。その証拠に、最近、経済欄で見た不可解な一行見出しを掲げる。わたしにしにはなんのことか全くわからなかった。

アソバンテッジ最有力に（9.9）

一段十一行の本文に、本文と同数・同大、ゴチック体の見出しである。経営再建中の三洋電機のある部門の売却交渉に関するものだが、これで理解せよというのだろうか。

要するに、見出しは字数を無理に節約せず、小さな字でよいから正確で明快な日本語を心がけるべきである。

大リーグの報道に注目しよう。初めに今年移籍した岩村選手に関わる記事を順に見る。

①〈無安打にも＝岩村は淡々〉（4.15）

②復帰の岩村、1安打でも「反省」（4.22）

③〈5試合無安打も＝岩村「焦りない」〉（3.11）

①②の「にも」「でも」から「に」「で」を省いた表現が③、それに並んで松井選手に関する④がある。

④〈無安打にも＝松井秀淡々〉（3.11）

⑤〈今季で引退も＝衰えぬ闘争心〉（2004.6.1）

⑥〈批判噴出も＝守備で仕事〉＝松井（2004.6.1）

⑤は四十歳のクレメンス投手が今季限りの引退を表明しているが、の意、⑥は松井選手の打撃不振に批判が続出しているが、の意。ともに「も」を逆接の助詞として用いている。

動詞を受ける逆接の助詞「も」は平安朝末からごく稀に用いられ、特に近代の文語文で好まれた。だが右の②⑤⑥の例は名詞にじかに接した、それとは似て非なるもので、現行の国語辞書にも記述されていない。これは新聞が作った新文法らしい。なお、③以外が二行主義・同字数主義の結果であることにも注意しておこう。

右のようにスポーツ欄に多いのだが、無論その他の欄にも広がっている。

装置導入も頼りは「人」(2005.5.15)

安全のために学校の門につけた錠の操作に関する記事の見出しである。名詞以外への承接なら構わないというわけでもなく、首を傾げたい例もある。

資本参加ならずも「成果」強調(2005.5.1)

ライブドアによるニッポン放送の経営権取得をめぐる報道である。ここでは名詞ならぬ動詞句「成らず」に接して、「成らずとも」の意で用いたらしい。これでは、「計らずも」「心ならずも」などの詠嘆用法に抵触する。

我が切り抜きの最古に属する記事の見出しを引く。

ソウルの被爆者治療へ＝個人で2人招く＝在日韓国人(1976.1.18 広島版)

本文には「治療のため」とある。「治療」は動作を意味する名詞である。

モスクワ〝陸の孤島〟へ＝観光客ら脱出に必死＝〈ソ連国営機＝乗り入れ禁止〉(1983.9.13)

ソ連の旅客機の乗り入れを政府が禁止したので、外国に出ることが難しくなるという記事で、モスクワが陸の孤島同然になるという意味の見出しなのである。

助詞「へ」をかく用いるのは新聞社の発明で、「連載」④には、

確実だが未確定のときに「衆院通過へ」「予算案成立へ」のように使う。つまり未来形を表す「へ」。昔は「通過せん」などといっていた。紙面の迫力を減らすので、多用はしない。

と解説している。その「通過せん」方式は、新聞の見出しにおける文語表現の常用で珍しくもない。たまたま読んで

いた七十年前の東京朝日新聞（1937）には、「新政策樹立へ＝特別議会提出の準備」（夕 5.6）のほかに、「銓衡へ、確立へ、倒閣へ」などがあり、使用数は「ん」とほぼ拮抗している。「へ」の用例には「明・一路覇権へ＝攻守に立教圧す」（5.5）もある。大学野球で明治大学が優勝に近づいたことを報ずる記事である。「通過、確立、樹立」などはサ変動詞の語幹になるが、「覇権」は動作ではない。

ここには、報道媒体としての新聞の宿命が現れている。新聞記事の多くは直近に出来したことを報ずるものである。そこで、見出しに動作的な意味の名詞（例、安倍首相辞意を表明）、無標の動詞（例、所信表明後、静養拒む）を用いると、それが一般に過去時制を帯びる、という独特の文体を獲得したことである。未来時に属する事態には有標の表現が必要になり、「けふ」などの時詞、助動詞「ん」などを用いた。助動詞「ん」の後身は口語「う」であるが、近代日本語では助動詞の表現が分化して、意思の意味は「う」、推量の意味は「だろう」が担うことになった。新聞の見出しに「確立するだろう」では締まらない。そこで、右に見た「へ」を用いたのだ、とわたしは考える。

格助詞「へ」は動作の向かう目標を示すことが本義で、「陸の孤島へ」は「行く」などの移動動詞を予想させるので、先の見出しが強い違和感を与えるのは当然である。動作自体を対象や目的とする表現には、動作名詞に続けて「のために」「すべく」などを用いるのがふつうであった。したがって、新聞社の発明した新文法は、本来の用法を極端に拡げたものだといえよう。

中世以降の日本語史に、「へ」が「に」の領域を侵蝕することが進行し、近年もその傾向が著しいことも論じたい主題である。とまれ、新聞に「約62万トンへ減ったためだった」（2005.3.6）などを見るのは珍しくもない。新聞の発明した新文法はその侵蝕に拍車をかけ、自ら「救助へ向かう」（2007.4.15）と書いているが、「事故現場へ救助に向かう」がまともな日本語であろう。日夜これを見せつけられた日本人が、正統な日本語だと錯覚したとて不思議はない。一昨年、著名人による『憲法を変えて戦争へ行こうという世界にしないための18人の発言』（岩波ブックレット）が刊行されたときは己が目を疑った。「戦争へ行く」とはどんな行為なのだろう。昨夏、『美しい国へ』という本がでたときは心中で「そこへ何しに行くのですか？」と問うた。この本の著者の日本語力は疑わしいと思っていたら、案の定、宰相

として初の施政方針演説は片仮名語だらけであった。

今夏、パキスタンで神学生がモスクを占拠する事件が起こった。政府軍による制圧後にモスクの屋根を塗り替えた記事が出た。学生が赤く塗った屋根、本来の白に戻った屋根、二枚の写真を載せた記事の題は「モスク、再び白へ」であった（2007.7.29）。

「春へなると桜が咲く」「人妻へなった花子」などの日本語が氾濫する日は近い。

新聞社による新文法を喜ぶ人がいる。例えばイアン・アーシーさん。「イアンさんの日本語カルテ」に、「「てにをは」に感謝を」と題して「助詞を最も有効に利用しているのは新聞の見出しだろう」という（毎夕 1997.6.19）。その形式と架空の例文を引く。

未来形は「へ」「沖縄基地、一部諫早干拓地に移転へ」

仮定法は「も」「行改で国会の廃止も」

命令形は「を」「庶民にＶＩＰ口座の提供を」

「なる」「なっている」「なった」等は「に」で統一。

「動燃のうそ、過去最多に」（毎夕 1997.6.19）

これはまさに、寿岳章子さんが『日本語と女』（岩波新書 1979）で批判した、女性週刊誌のグラビア記事の表現である。近年の低俗なテレビ番組の字幕にも通ずる。

「連載」④は、「箱入り女房」などの新語作者ドメニコ・ラガナさんの発言で結ぶ。

見出しは、読者に訴えるためのものだから、型破りな日本語を使ってもかまわない。むしろ、もっとユーモアのある見出しをつけてほしいと思います。

だが、本稿で言及したものにユーモアはない。日本語の論理を踏みはずしたものである。

「型破りな日本語」の最たるものが、この時評の第三回で触れたスポーツ新聞の大見出しであろう。そこでは丸谷才一さんの『日本語のために』（新潮社 1974）を引いて私見を添えておいた。右の肯定的な発言がともに外国人のものであることに注意せねばならぬ。丸谷さんと同じく、わたしはそれに反対する。母なる日本語を愛するがゆえに。

「教育に新聞を（NEWSPAPER IN EDUCATION）」（略称ＮＩＥ（エヌアイイー））という運動がある。学校教育に新聞を活用しようというもので、新聞協会が支援し、二年ほどまえには学会も発足した。その運動家たちが読んで歓喜したに違いな

い、「新聞を熟読し＝考える力養う」と題する良い子の投書がある（2007.6.10）。まじめな高校生に違いない。だが、わたしの見たところ、現実の新聞は子供らの日本語をまともに育てることができない。

受験生集めのための大学公開のさい、教員が来訪者の質問に答える「学科別相談コーナー」が設けられる。そこに、時には親子一緒に、稀に親だけが来ることもある。その親が、国語の力を高める妙案はないか、新聞を読む習慣をつけさせるべきか、などと尋ねる。この国には、新聞を読めば日本語力が高まると素朴に信じている人がまだいるのである。

わたしは答える、読むなら古典あるいは古典的な本に限る、と。新聞の日本語破壊力に太刀打ちできないうちは読むべきではない。なるほど、新聞を読んだら少しは知識も殖えるだろうが、その一方で健全な母語感覚は損なわれる。母語が破壊されて得た知識が何になるか。言うまでもなく、民族精神の中核をなすのは言語、日本人の魂は日本語によって育まれる。知識と引き換えに新聞に魂を売ってはならぬ。いま日本の子供たちは新聞を読むとばかになるのだ。そして、おとなも。

毎日新聞に絶縁状を突きつけて新聞の定期購読をやめてから九年、寿命の尽きたテレビ受像機を廃棄してから四年、我が耄碌がこの程度で止まっているのは、新聞・テレビに触れることが少ないからだと思う。わたしは新聞に情報源の価値しか認めないが、社会生活に必要な情報は他の媒体から十分に得られる。しょっちゅう立腹しながら数紙の新聞を購読する高島俊男さんも最小限のつきあいにとどめたら、精神衛生はかなり改善されるだろうに。

（二千七年夏）